

Title	『夢十夜』における民俗的要因
Sub Title	Some folkloric elements in Natsume Soseki's Yumejuya
Author	鈴木, 覚雄(Suzuki, Kakuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.39, (1980. 2) ,p.54- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00390001-0054

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『夢十夜』における民俗的要因

鈴木 覺 雄

- 一、井守の呪性
- 二、杉の土俗的信仰
- 三、天探女伝説
- 四、馬蹄石伝説
- 五、結語

漱石の「夢十夜」は、実際に漱石自身が経験した夢を集めたと思われるような複雑な様相を呈し、その一種混沌とした超時空性とイメージの集合は、この作品の世界をより難解なものにしている。本稿では、そうした「夢十夜」の世界を日本の民俗的側面から照射することによって検討し、新しい照明を加えてみたいと考える。

一、井守の呪性

十夜の夢のうち、民俗的要素が認められるのは、まず第三夜の夢である。この第三夜の夢は、盲目の子供を背負った父親の話で、怪談的性格の濃いものである。

ある雨の降る晩、第三夜の主人公は六つになる子供を背負って歩いている。その背中の子供は、盲目で大人のような言葉つきで話し、一種の子知能力をそなえている。鷺が鳴くと言えば鷺が鳴き、石が立っているはずだと言えば八寸角の石が立っており、そこには井守の腹の様な赤い色で字がほられている。我子ながら薄気味悪く恐怖さえ感じる主人公は、この子を闇の中に見える大きな森に捨てることを決心する。そうして雨の中を夢中で歩いていると、いつしか森の中に入りこみ、背中の子供が、「此処だ、此処だ。丁度其の杉の根の処だ」といって、百年前の丁度こんな晩におれを殺したろうと言う。主人公は、この言葉を聞くや否や確かに一人の盲目を殺したという自覚が起こり、自分は人殺しだったんだなと気がついた途端、「背中の子が急に石地蔵の様に重くなった。」という話である。

この第三夜の背景については、すでに典拠と目される「こんな晩」型の民話や歌舞伎などの伝統文芸が認められることが指摘されており、第三夜が、そうした民話や伝統文芸の上に成り立つ作であることは疑いないだろうと思われる。

右の指摘を踏まえて、もう少し深くこの夢の中に降り立ち、第三夜の結末の恐ろしい自覚自分は人殺しであったという自覚への伏線と見られる鷺と井守について考えると、まず鷺は、柳田国男の「野鳥雜記」(定本第二十一卷)に、「信ずる人がもう少なくなつて、聴衆を無知文盲の幼童に求めた以前、久しい間夜の鳥は成人にも恐れられた。鶴は単に未明の空を飛んで鳴くために、その声を聞いた者は呪言を唱え、鷺も梟も魔の鳥として、その異常な挙動を見た者は祭

をした」(十八)とあり、これから驚が魔の鳥として恐れられていたことが理解される。このような驚に対する信仰は、第三夜の驚にとっても、おそらく無縁ではなく、伏線としての、あるいは不吉なイメージとしての機能は、第三夜の構成上、十分に計算されていたはずである。

次に井守について見ると、漱石の全作品で井守があらわれるのは二カ所だけで、一つは、この「夢十夜」の第三夜であり、もう一つは、「虞美人草」の中に見られる。両作品の執筆時期が極めて近いことも留意しておきたい。⁽¹⁾「虞美人草」の井守は次のように書かれている。

悲劇マクベスの妖婆は鍋の中に天下の雑物を攫ひ込んだ。石の影に三十日の毒を人知れず吹く夜の蝨と、燃ゆる腹を黒き脊に藏す蠨螋の膽と、蛇の眼と蝙蝠の爪と、——鍋はぐらくくと煮える。妖婆はぐるりと煮え、妖婆はぐるりと煮え、果て、突れる爪は、世を咀ふ幾代の錆に瘡せ盡くしたる鐵の火箸を握る。煮え立つた鍋はどろどろの波を泡と共に起す。——讀む人は怖ろしいと云ふ。(十)(傍点引用者。以下同じ)

ここは、シェイクスピアの「マクベス」の一節を引いて、その妖婆の不気味さと藤尾の母の滑稽さとを比較しているところである。注意すべきは、井守の「燃ゆる腹を黒き脊に藏す」という傍点部分の形容の仕方である。この一節は、原典の訳では次のようになっている。

第一の魔女 釜のまわりをぐるぐる廻り、腐ったはらわた放りこめ。(三人は釜の周囲を左の方へめぐりはじめる)

それ、ひき蛙、冷たい石に押しつぶされて、三十一日三十一夜、眠りつつけて、毒の汗ながす、お前が最初に魔法の釜に、煮えろ、煮えろ!

三人この世の憂さも、辛さも、倍まじだぞ、それ、焰はごうごう、釜はぐらぐら。(三人は釜を掻きまわす)

第二の魔女 おつぎは沼蛇のぶつ切りだ、煮えろ、焼ける。いもりの眼玉に蛙の指さき、蝙蝠の羽に犬のべろ、蝮の舌に盲蛇の牙、とかげの脚に梟の翼、このまじないで、恐ろしい禍いが湧き起る、さあ、地獄の雑炊、ぶつぶつ煮えろ、ぐらぐら煮えろ。

三人 この世の憂さも辛さも、倍ましたぞ、それ、焰はごうごう、釜はぐらぐら。(釜を掻きまわす)「マクベス」第四幕第一场・福田恆存訳)

右の訳文および原典の英文を見るかぎり、漱石の「虞美人草」での訳は原典に忠実な訳と言うことはできない。かなりの省略と原典にない誇張された表現がなされていると見るべきである。その際、「いもりの眼玉」を「燃ゆる腹を黒き脊に藏す蝶螈の膽」と訳し出しているのは、言うまでもなく漱石がその腹の赤い色に注目していることを意味する。赤は、漱石にとって禁忌の色である。

また一方「マクベス」のいもりは、まじないのための地獄の釜に入れられることから、魔女の呪いに深い関わりを持つ生物の一つと考えられる。以上のような点から、ここでは英文学におけるいもりの呪性と漱石固有の赤へ対する感情とが融合された形で表現されていると言えよう。ちなみに、魔女の煮えたぎる地獄の雑炊の釜には、その他「梟の翼」も入れられる。梟は日本では魔の鳥、イギリスでは魔女のまじないに必要とされている。「夢十夜」の第九夜では、この梟が暗い境内の中で鳴いているのである。

ともあれ、いもりの持つ不吉さは「マクベス」の例から確認することができる。また「マクベス」の中の「このまじないで、恐ろしい禍いが湧き起る」という台詞も第三夜の結末から考えて、いもりの持つ「禍い」の前兆としての役割を裏付けてくれる。このように見てくると、鷲や井守が第三夜の中で、どのような位置と役割を与えられているか、あ

る程度確認することができるだろう。

二、杉の土俗的信仰

雨は最先から降つてゐる。路はだん／＼暗くなる。殆んど夢中である。只脊中に小さい小僧が食付いてゐて、其の小僧が自分の過去、現在、未来を悉く照して、十分の事実も洩らさない鏡の様に光つてゐる。しかもそれが自分の子である。さうして盲目である。自分は堪らなくなつた。

「此處だ、此處だ。丁度其の杉の根の處だ」

雨の中で小僧の声は判然聞えた。自分は覺えず留つた。何時しか森の中へ遣入つてゐた。一間ばかり先にある黒いものは甍に小僧の云ふ通り杉の木と見えた。

「御父さん、其の杉の根の處だつたね」

「うん、さうだ」と思はず答へて仕舞つた。

「文化五年辰年だらう」

成程文化五年辰年らしく思はれた。

「御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」

自分は此の言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな闇の晩に、此の杉の根で、一人の盲目を殺したと云ふ自覺が、忽然として頭の中へ起つた。

第三夜のクライマックスにあたる箇所である。ここでは百年前に盲目を殺した場所が、杉の木の根の処となつてお

り、漱石はこれにかなり拘泥した形で四回ほど繰り返し返している。

第九夜でもやはり杉の木が出され次のように書かれている。

片側は田圃で、片側は熊笹ばかりの中を鳥居迄来て、それを潜り抜けると、暗い杉の木立になる。それから二十間許り敷石傳ひに突き當ると、古い拜殿の階段の下に出る。(中略) 鳥居を潜ると杉の梢で何時でも梟が鳴いてゐる。

若い母親が三つの子供を背負って、夫の無事を祈るために近くの神社へ御百度を踏みに行く場面である。鳥居を潜ると「暗い杉の木立」になり、その杉の梢では何時でも梟が鳴いている。梟は、深読みかも知れぬが、前述したように、結末の「かう云ふ風に、幾晩となく母が氣を揉んで、夜の目も瞑ずに心配してゐた父は、とくの昔に浪士の爲に殺されてゐたのである。」という悲劇の前兆として第九夜の闇を鳴いているように思われる。ここに描かれる杉の木も不気味である。もう少し他の作品から杉についての描写を追ってみることにする。

空は茶壺の蓋の様に暗く封じられてゐる。その何處からか、隙間なく雨が落ちる。立つてゐると、ざあつと云ふ音がする。是は身に着けた笠と蓑に中る音である。夫れから四方の田に中る音である。向ふに見える貴王の森に中る音も遠くから交つて来るらしい。

森の上には、黒い雲が杉の梢に呼び寄せられて奥深く重なり合つてゐる。夫れが自然の重みでだらりと上の方から下つて来る。雲の足は今杉の頭に絡み附いた。もう少しすると、森の中へ落ちさうだ。

これは「夢十夜」の半年ほど後に、「夢十夜」のようなものをという『大阪朝日』の求めに応じて書かれた「永日小品」中の一編「蛇」の一節である。「蛇」は、雨の激しく降る晩、叔父と主人公(子供と思われる)の二人が手桶を提げて魚を獲りに出掛ける話である。この話には叔父が鰻と間違えた蛇を投げつけたところ、蛇が「草の中からむくりと

鎌首を」もたげ、二人を見つめて、「覚えてゐろ」と云う条があり、背景の暗い闇と激しい雨という設定などからも「夢十夜」の第三夜に通じる怪談性が認められる。ともかくここでも杉の木は、一種特別の描かれ方をしているのは明らかである。

また「虞美人草」の第一章では、叡山に登る甲野さんの杉に対する異様な眼差しが注意される。

草山を登り詰めて、雑木の間を四五段上ると、急に肩から暗くなつて、踏む靴の底が、湿つぽく思はれる。路は山の脊を、西から東へ渡して、忽ちのうちに草を失するとすぐ森に移つたのである。近江の空を深く色どる此森の、動かねば、その上の幹と、その上の枝が、幾重幾重に連なりて、昔しながらの翠りを年毎に黒く疊むと見える。二百の谷々を埋め、三百の神輿を埋め、三千の悪僧を埋めて、猶余りある葉裏に、三貌三菩提の佛達を埋め盡くして、森々と半空に聳ゆるは、傳教大師以來の杉である。甲野さんは只一人此杉の下を通る。

右よりし左よりして、行く人を両手に遮ぎる杉の根は、土を穿ち石を裂いて深く地磐に食ひ入るのみか、餘る力に、跳ね返して暗き道を、二寸の高さに段々と横切つて居る。登らんとする岩の梯子に、自然の枕木を敷いて、踏み心地よき幾級の階を、山靈の賜と甲野さんは息を切らして上つて行く。

行く路の杉に逼つて、暗きより洩るゝが如く這ひ出づる日影蔓の、足に纏はる程に繁きを越せば、引かれたる蔓の長きを傳はつて、手も届かぬに、朽ちかゝる齒朶の、風なき晝をふら／＼と揺く。

「此所だ、此所だ」

と宗近君が急に頭の上で天狗の様な聲を出す。(一)

ここは、甲野さんが叡山の杉の木の下闇を一人歩いて行くところである。生い茂った杉の木の中を通りながら甲野さ

んの眼は、杉の上方の幹や枝を、下方の杉の根を見つめる。そしてそれらの杉の木が「二百の谷々を埋め、三百の神輿を埋め、三千の悪僧を埋め」、「三貌三菩提の佛達を埋め盡くして」いると述懐される。甲野さんの杉に向う感性は異様に読む者に迫る。

この他の作品にも杉について言及している箇所は多く、それらはいずれも特異な眼をもつて捉えられており、時には畏怖さえおぼえているものも見られる。このような杉の捉え方は、漱石独自の詩的感受性によるものと考えられるが、しかしそれだけでは理解が十全ではない要因があるように思われる。

杉は、「直に生ふるもの故に名とするよし萬葉集抄に見えたり、げにもはら神木とし、正直の表物なれば、日本紀にも、石上振之神楓、萬葉集にも、三諸の神すぎなども見えたり、」（「倭訓栞」前編十二須）とあるように、名の由来が真直に伸びて行く性質にあることや古くから神木として扱われていたことが理解される。また杉は、こうした神木としての性格のほかに、相生杉、争い杉、逆さ杉、注連杉、杖杉、天狗杉、聖杉、化物杉、矢立杉、良弁杉・・・（「日本昔話事典」弘文堂、「神話伝説辞典」東京堂）といった多くの伝説をかかえ持つ樹木でもある。これらの伝説から杉は伝承性豊かな樹木であると言うことができよう。ちなみに、これらが全国に広く分布していることなども考え合わせておきたい。

さて、杉についてはまた、柳田国男の「神樹篇」（定本・十一卷）に次のような興味深い伝説が挙げられている。

土佐長岡郡西豊永村の薬師堂の逆さ杉は、行基菩薩登山の折に、携へ來たる杖を挿すと謂ふ。眼を病む者此木に祈れば靈驗ありと信ぜられて、今でも「め」の字を書いた紙方が、樹下に白く散つて居る。曾て一人の名僧が登つて來

て、此木の枝で眼を突いて、明石の盲杖櫻とはちやうど反対に、こゝで盲目に爲つてしまった。其亡魂が此杉樹に宿つて居る爲に、此の如き奇瑞であるのだとも傳へられる。

柳田の紹介しているこの逆さ杉伝説は、杉の木の枝で目を突いて盲目になつてしまつたという杉―盲目の関係と、その僧の亡魂が杉の木に宿っているという二点において興味を引かれるものがある。これは第三夜の盲目を殺した場所が、杉の根の処という設定に直接は結びつかないにしても、杉にこのような伝説が纏わりついている事實は、注意しておいてもよいだろう。

同じような伝説に「天皇、貴族、高僧、武将の遺骨が根もとに埋められているという」(GENRE JAPONICA 19 植 物編 坪井洋文) 姥杉伝説、一本杉伝説がある。杉の根もとに遺骨が埋められているというこの伝説は、やはり杉に纏わる伝説の一つとして記憶しておいてよいだろう。これら逆さ杉伝説や姥杉、一本杉伝説は、数多い杉についての伝承の中で、杉の枝―盲目、杉の木―亡魂、杉の根―遺骨―死というイメージの関連から、第三夜の杉に近い内容を有していると考えることが可能である。

杉のほかに第九夜では、古い檜や大きな銀杏が登場する。これらの樹木も、その背景を探れば神話伝説の類の話が纏わりついている。たとえば、檜は神話では、素戔鳴尊の胸毛から作り出されて「瑞宮の材」と指定されたものであり、以来神社建築にはなくてはならないものであるという。⁽⁹⁾ また銀杏は、中世あたりに仏教徒が原産地である中国から宗教木として持ち帰って以来、神社仏閣とは縁の深い結びつきをもつ樹木であるという。⁽¹⁰⁾

漱石の作品における檜と銀杏についての描写は次のようなものである。

檜―其の時母の持つてゐた雪洞の灯が暗い闇に細長く射して、生垣の手前にある古い檜を照らした。(第九夜)

杉か檜が分からないが根元から頂き迄 悉く蒼黒い中に、「草枕」一)

百萬本の檜に取り圍まれて、海面を抜く何百尺かの空気を呑んだり吐いたりしても、人の臭ひは中々取れない。

〔草枕〕一)

其の山は(中略)色は眞蒼で、横から日の差す所丈が光る所爲か、陰の方は蒼い底が黒ずんで見えた。尤も是れは日の加減と云ふよりも杉檜の多い爲かも知れない。ともかくも蒼鬱として、奥深い様子であつた。(坑夫)

障子を明けると月夜だ。目に觸れるたびに不愉快な檜に、蒼い光りが射して、黒い影の縁が少し烟つて見える。檜に秋が來たのは珍らしいと思ひながら、雨戸を閉てた。(三四郎)四)

銀杏―土塀の續いてゐる屋敷町を西へ下つて、だら／＼坂を降り盡くすと、大きな銀杏がある。此の銀杏を目標に右に切れると、一丁計り奥に石の鳥居がある。(第九夜)

銀杏はその他「趣味の遺傳」における寂光院の化銀杏、「心」における雜司ヶ谷の一本の大きな銀杏などがある。この中で銀杏については、実方清氏に「漱石文芸においては銀杏のイメージは重要である。それは常に墓參、寺と共に登場する」(「夏目漱石辞典」昭47・4・清水弘文堂)という指摘があり、また「趣味の遺傳」の中で墓場の入口にある化銀杏は、「生と死の境界に立っている」、「異次元の境界」(越智治雄氏「漱石私論」昭46・6・角川書店)であるとする優れた見解がある。そういう意味では、第九夜の銀杏も異次元への「目標」として立っていると見える。大きな銀杏の向側が異次元、つまり死の世界へと通じるとするならば、杉も檜も神社仏閣に関係している点で、異次元Ⅱ死の世界に存する樹木と考えることができる。これは漱石の作品で杉と檜が同時に捉えられていることと無関係ではないだろう。

檜は古き神聖なる世界へと通じることから漱石の作品では死のイメージを誘う。第九夜の「古い檜」が「雪洞の灯」に照らし出されるのは、「月の出てゐない夜中」に「黒い頭布を被つ」た父が、何処かへ出て行く時である。死の伏線は「古い檜」によっても張られている。夜の境内には、死の樹木・杉と死を呼ぶ鳥・梟が布置されている。

以上のように見てくると、漱石の杉へ対する異様な感性は、一つは杉が神社仏閣空間、つまり古き神聖なる世界に絶対的な死の世界へ通じるがゆえの死のイメージであることをもがたっているように思われる。しかしまた同時に、杉は今まで例証して来たように、古来から神木として崇められ多くの伝説を背後に秘めている樹木でもある。おそらく、漱石の内部では杉にそうした伝承が、いくつか纏わりついていることなど自明のこととしてあり、伝説の樹木としての杉と死のイメージを感受させる杉とが渾然としてあつたろう。その際、第三夜・第九夜の土俗的世界や第三夜の鷺・井守といった不吉な生物のイメージの配置などを考え合わせると、第三夜における杉は、やはり先の生物と同じように計算された土俗的な信仰の面をより強く打ち出されていたのではないだろうか。

漱石は江戸っ子だった。そういう民俗的な伝承を生育期に見聞する機会は、いくらかもあつただろう。それは当然、漱石の英文学的な高い素養とともにその心象にとけ込んでいた知識でもあつたのである。

三、天探女伝説

次に第五夜の背景について考えたい。

第五夜は「神代に近い昔」の話で、主人公の男は「軍」に敗北し捕虜となり敵につかまっている。そして男は当時の習慣で敵の大将に「死ぬか生きるか」と聞かれたとき、屈服しない方の立場である死を選び、一言死ぬと答える。それ

で敵の大將はすぐに劍を抜いて殺そうとするが、男は「死ぬ前に一目思ふ女に逢ひたい」といって「夜が明けて鶏が鳴く迄」の猶予を与えられる。一方女は、白い裸馬に乗り男をめざして走って来るが、しかしたどり着く前に天探女が鶏の声を真似たために女と馬は驚いてか、岩の下の深い淵に落ちてしまう。最後は「蹄の跡はいまだに岩の上に残つて居る。鶏の鳴く真似をしたものは天探女である。此の蹄の痕の岩に刻みつけられてある間、天探女は自分の敵である。」というふうになっている。ここには、鶏の声の真似をして女が男に逢いに来るのを邪魔し、しかも死に追いやった「天探女」という「敵」が登場する。この天探女は鶏の声の真似をして女を深い淵に落とし男との再会を永遠に阻止してしまふのだが、あまのじゃくが鶏の声を真似て何かの邪魔をするという話は、昔話や伝説にその類型を見出すことができる。折口信夫が彦岐に行ったときの記録「雪の鳥」(昭和二年九月頃草稿—全集・第三卷)には次のような話が紹介されている。

他の地方では、非常に断篇化してあるあまのじゃくの童話が、彦岐ではまだ神話の俤を失はずにある。(中略) 神様——竹田ノ番匠と言ふ——が、彦岐の島を段々、造つて行つて、竟に、けいまぎ崎の處から對岸の黒崎かけて地續きにしようとして、藁人形を三千體こしらへ、此に咒ひをかけ、はたらく様にして、一夜の中に造り上げようとした。あまんしやぐめが、其邪魔をしようとして、一番鶏の鳴きまねをした。たけたの番匠が「けいまぎ(掻い曲げ)うっちよけ(棄置け)」と叫んだ。其で、とう／＼爲事は出来上らなかつた。其橋の出来損ねが入り海に残つた。けいまぎ崎である。

此話は、到る處に類型の分布してゐるもので、鬼や天狗などが、今一息の處で鶏が鳴いた爲、山・谷・殿堂を作り終へなかつた、と言ふ妖怪譚に近いものとして、残つてゐる。

この中に出てくる「あまんしやくめ」は、「あまのじゃく」の発音が訛ったものである（『日本国語大辞典』）。折口が引いているこの話は、神の一晚での国作りを邪魔するために、あまんしやくめが一番鶏の鳴き真似をしたということになっており、これはそのまま一晩だけ女を待つことを許されるが、天探女の妨害によって二人の再会は阻止されるといふ第五夜の構造につながる。

また柳田国男の「桃太郎の誕生」(定本・第八卷)の中の一編「瓜子織姫」に、天之探女アマノサグメについて考察した章があり、その中にやはりアマノジャクが鶏の鳴く真似をして神の為事を妨害・阻止するという話が紹介されている。

諸国に数多く残っている一夜工事の伝説に、神が鶏の声をまねて鬼の計画を中止せめられたというのがあるかと思うと、また一方にはそれと反対に、神や偉人の世に幸いせんとする企てを、アマノジャクがあざむいてさまたげたということにもなっているのは、かなり有力な暗示のように私には受け取れる。佐渡では役えんの行者ぎょうじやと飛驒ひだの匠たくみとが、その一夜の工事を競争していた際に、やはりアマノジャクの鶏の声にだまされて、行者は国府川くふがわを鉏あの柄え三たけ掘り残り、匠は薬師堂の戸を一枚作り残して中止してしまったといっている。越後では石地の羅石明神が、その佐渡の島へ岩橋をかけようとして、これも眷属けんぞくのアマノジャク、一名を山彦というなまげ者が、鶏の鳴くまねをしたのにあざむかれて、未完成のままに姿を隠されたといっている。

ここでは、佐渡と越後の話が紹介されているが、このほか四国その他の地方にも、この種の類型的伝説は多く見出すことができる。⁽¹¹⁾

第五夜は「神代かみよに近い昔」として設定されている。これは、折口と柳田によって紹介されているあまのじゃくが神の為事の妨害者としてあらわれていることとひびき合う。第五夜の背景としての神話的世界にも着目しておきたい。

四、馬蹄石伝説

本章では、前章の終わりで触れた第五夜の神話的世界にかかわるもう一つの伝説―馬蹄石伝説を取り上げたい。

馬は前足の蹄を堅い岩の上に發矢^{はつし}と刻み^{きま}込んだ。

女と女が乗って来た白い裸馬は、天探女の策略によって深い淵へと落ちて行く。その際に馬は前足の蹄を堅い岩の上に刻み込んでいる。このように馬の蹄が刻まれた岩や石については、馬蹄石という形で各地に分布する伝説を見出すことができる。「日本昔話事典」の「馬蹄石」によれば、

岩石に馬の蹄の跡があるという伝説。(また、馬蹄そのものの形状を持った岩を指す場合もある。)神が馬に乗って来臨した跡とか、英雄が乗っていた愛馬の足跡と説明するものがほとんどである。なかには、神社の神体として祀られ、神事的要素を備えているものもあるが、このようなものが馬蹄石伝説の始源といえよう。静岡県安倍郡大里村(現、静岡市安倍町大里)にある駒形神社の神体は馬蹄石である。これは、神が乗物(馬)に乗ってやって来るといふ古来からの信仰の表出したもので、祀られている神に關係する岩石として崇敬されている。(以下略)

とあり、その伝説の始源に神が馬に乗って来臨した跡であるという興味深い指摘がなされている。また「神話伝説辞典」の「馬蹄石」には、女と白馬が結びついた形の伝説を見出すことができる。

福岡県嘉穂郡^{かほ}には天女の池があり、むかしこの池に天女が白馬に乗って降ってきて人間に嫁した。馬は石に触れて死に、石面には六、七ヶ所に馬の跡がある。福岡県太宰府のは、神功皇后が三韓征伐のとき、ここの宝満山に登り給うと、大神が馬に乗ってあらわれ、その馬の蹄のあとがついた。あるいは天武天皇の御代、心蓮上人が宝満山に入っ

て修業していると、ある日高貴の女性があらわれ「われは玉依姫である。民を護り国を安んずるためここに久しく留まり、夷敵を退けているが、いまお前の法によって現れたのだ」と告げると、美しい女神の姿は蔽めしい金剛神の姿と化し、竜馬に乗って雲とともに飛び去った。その神馬の蹄の跡がこの石に残ったともいう。(以下略)

第五夜の冒頭には、「何でも余程古い事で、神代かみよに近い昔と思はれる」とあり、第五夜の深い闇を支配しているのが、まぎれもなく神話的な時空であることを示している。この設定と馬蹄石の伝説との関係は相反するものではない。「天女が白馬に乗って降ってきて人間に嫁した」ときの馬の蹄の跡、女神が神馬に乗って天上に帰る際の蹄の跡、とりわけ前者の天女―白馬―結婚―そして白馬の死とその蹄の跡という神話伝説の存在は、前章で見た天探女伝説とともに神話的次元に位置する第五夜の背景として十分に考えられるべきものである。

馬蹄石伝説との関連をもう少し追う。

「蹄ひづめの跡はいまだに岩の上に残って居る」「此の蹄の痕あとの岩に刻みつけられてゐる間、天探女あまのじやくは自分の敵かたきである」この第五夜の蹄の「跡」あるいは「痕あと」には、天探女によって永遠に女との再会を閉ざされてしまった主人公の怨念が象徴的に刻みつけられているように思われる。馬蹄石伝説における神来臨の際の、あるいは天上へ帰る際の神馬の蹄の跡には怨念としての蹄の跡は無関係である。ところが、これが時代をへて神来臨の信仰が薄れ、英雄の伝説と置き変わってくる。と怨念と蹄の跡の関係が無関係ではなくなってくる。

柳田国男は書いている。

多クノ馬蹄石ニモ亦英雄ノ昔語りヲ伴ヒ居リ、而モ一々ニ尤モラシキ因縁アリ。

このあと義経・曾我五郎を始めとする何人かの英雄が残したとされる馬蹄石について述べたあと次のように続く。

サテ此等ノ多クノ伝説ニ就キテ其馬主ノ生涯ヲ比較スルニ、一二ノ例外ヲ除キテハ極メテ著シキ第二ノ共通点アルカト思ハル。即チ彼等ハ単ニ一代一方ノ英俊ナリシト云フ外ニ、多クハイマダ齡ノ盛リニ於テ何レモ不自然ナル死ヲ遂ゲタル人ナリ。有余ル生活力ヲ銷尽セズ、而モ執著ノ未成ラズシテ終ヲ取りタル人タチナリ。身ハサリテ念力ヲ此世ニ留ムルニ必要ナル条件ヲ具ヘタル人々ナリ。思フニ我等ガ祖先ノ特ニ重要視セシハ此未了ノ念力ナリキ。(中略)

然ラバ何故ニ斯ク迄弘キ信仰ガ行ハレタルカト問ハズ、是レ全ク前代人ノ靈魂不朽ニ関スル概念ガ此ノ如クナリシ結果ト言フノ外無キナリ。(中略) 而シテ此ノ古キ意味ニ於ケル「タムリ」ノ神徳ヲ、最モ著明ニ發揮スルニ適シタルハ、一念ノ力ノ強烈ナル人々ガ此世ニ生キ残シタル御霊ナリ。(中略) 更ニ遠慮無キ断定ヲ自ラ許スナラバ、彼ノ天満大自在天神ノ信仰ノ如キモ、右ノ御霊ノ思想ヲ以テスルニ非ザレバ之ヲ解説スルコト能ハザルモノナリ。而シテ人間ニシテ能ク巖石ノ上ニ跡ヲ留メタリト云フハ、即チ此等ノ人々ノ乗馬ノ蹄ニ他ナラザルハ、誠ニ偶然ニハ非ザルナリ。(以下略)〔山島民譚集〕―馬蹄石―。定本・第二十七卷)

右の引用から明らかのように、岩石に刻み込まれた馬の跡の跡は、神話の域から離れるにしたがって英雄伝説と結びついて来る。その際、英雄と馬蹄石の結びつきは、若くして死んだ彼らの一念、生への執着とが一つの目安になっている。また柳田の説くように、御霊のすさまじい一念との関係から魂魄永住と巖石の上の跡を考えるならば、一層怨念あるいは執着と馬蹄石の結びつきが明瞭になってくるだろう。

第五夜の岩の上の蹄の「痕」には、主人公の怨念が象徴化されていると思われるが、それがどこまで伝説における怨念・執着の馬蹄石と関わってくるのかはわからない。ただ神話としての馬蹄石の他に、蹄の跡を英雄の魂魄と結びつけ

る伝説が日本全国に多く残っているという事実を指摘できるにすぎない。

五、結語

「夢十夜」は、以上見て来たように意外にフォークロリックな要因を多く含んでいる。これは、「夢十夜」の淵源となる「漾虚集」が七編中四編までをイギリスに舞台をとり、うち二編を英国における中世騎士伝説（アーサー王伝説など）に素材を取っていることと対照をなすように思われる。また、この「夢十夜」執筆前後には潜在意識への関心が急激な高まりを見せており、それはすなわち漱石が意識に対する無意識、つまり識閥下の暗い部分へと目を向けはじめたことを意味している。⁽¹²⁾ このような潜在意識のクローズアップや「夢十夜」における日本の伝説の取材は、漱石のこの時期の精神的位相を示すものと言えよう。しかし「夢十夜」が、そうした日本の伝説―フォークロリックな側面を垣間見せながらも、そこに英文学的要素が全く見られないというわけではない。つまり「夢十夜」は、「漾虚集」のような英文学的性格の強い世界と日本の土俗的世界との深い交感が認められる作品ではないかということである。「夢十夜」の世界は、日本の土俗性にもとづくイメージのみによって成り立っているわけではなく、その一方では英文学的な知性から来た文学的発想をいくつか認めることができる。⁽¹³⁾ そして後者の英文学的発想には、もはや消すことのできない漱石の西欧化された一面というものが窺われるのである。

また第五夜の背景には先に、天探女伝説や馬蹄石伝説が踏まえられているのではないかと論じたが、しかし一方では第五夜の女に、北欧神話のブルキールのイメージを見る説もあり、⁽¹⁴⁾ 確かにそうした非日本的な要素も認められなくはない。このように「夢十夜」は、一方では日本の土俗をめざしながら、もう一方では常に西欧的なイメージがつきまとい

ているという点が特徴的な所である。これは漱石の精神の在り処^か、つまり、日本の土俗性に結びつく先天的な刻印と、西欧の洗礼を受けた高度な知性という後天的特質の同次元的存在を示す以外の何物でもない。こうした漱石における精神の対極は、おそらく観念的には土俗的な自己と近代的な自己とに分裂しながら、せめぎ合いを続けていたに違いない。「夢十夜」は、まさにそうした観念の相剋が夢を媒介に止揚された時点に生まれた作品なのである。

付記 藝文学会（昭和54・6・30）で本稿を発表した際、池田弥三郎教授に、杉、天探女、馬蹄石に関する資料は、いずれも民俗学発足以後のものであり、この点、そうした文献のみで明治四十一年の「夢十夜」と各伝説との関係を処理することには問題が残るという指摘を受けた。そして明治期における各地の風俗習慣、民俗を記した雑誌『風俗画報』明治22・2―大正5・3・東陽堂）を見ることを教示され、これを調べたところ、姥杉、一本杉に近い伝説や杉の木の下でおこなわれた殺人の伝説が報告されていたが、しかしやはり大正三年に入ってからのものであり、各地における類似の伝説の存在は確認しえても資料としては「夢十夜」より時代が下ってしまい、依然として文献的資料の問題は残ることになった。以上を踏まえて、本稿を「夢十夜」への一視点、一問題提起としてお読みいただければ幸いである。

なお、本稿を作成するにあたり、檜谷昭彦先生の御指導御教示を賜りました。記して心から謝意を表させていただきます。

注

- (1) 相原和邦氏「『夢十夜』試論―第三夜の背景―」（昭和51・10・日本近代文学・23）に「丹後伊根の昔話」107こんな晩、「日本昔話集成」480こんな晩、の指摘があり、平川祐弘氏「子供を捨てた父―ハーンの民話と漱石の『夢十夜』―」（昭和51・10・新潮）に出雲の民話の指摘がある。
- (2) 相原和邦氏の前掲論文に指摘がある。
- (3) 同論文にすでに指摘がある。
- (4) 「虞美人草」（明治40・6・23―10・29・東京・大阪朝日新聞）、「夢十夜」（明治41・7・25―8・5・東京朝日新聞、7・26

(5) 「いもりの眼玉」は、原典の英文では「Eye of newt」とあり、その他の修辭はない。

(6) 「草枕」において赤い椿は、「あの色は只の赤ではない。屠られたる囚人の血が、白づから人の眼を惹いて、自から人の心を不快にする如く一種異様な赤である。」「又一つ大きいのが血を塗つた、人魂の様に落ちる。」「(十)」というふうにな、血や死のイメージをもって表現されている。「それから」の冒頭の二節には「枕元を見ると、八重の椿が一輪疊の上に落ちてゐる。代助は昨夕床の中で慥かに此花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謄毬を天井裏から投げ付けた程に響いた。」とあり、この椿の落花による不吉な幕開けは、ラストの「仕舞には世の中が眞赤になつた」という赤い運命に照応するように構成されている。また、色彩について触れた箇所では「代助自身は稻荷の鳥居を見ても餘り好い心持はしない。」「(五)」とある。こうした赤に対する感覚は、「夢十夜」では、第一夜の「唐紅の天道」、第七夜の「燒火箸の様な太陽」「蘇枋の色」に置き返る波、という一種毒々しい赤の表現につながっている。

(7) 「日本伝説研究」第三卷（藤沢衛彦・著、昭和6・9・六文館）の「梟の聲と傳説」の項によれば、梟は支那では悪鳥とされ、「悪鳥人家に鳴けば、即ち死亡の徴」などと言われたらしい。これは日本にも影響を与えていると言ひ。また梟は西洋の古典では「大抵災厄の使者」として扱われ、中世においては「如何なる呪文でも、不吉を知らせる梟が同意の叫びをあげなければ、その効驗は全く無いものと信じられて來た」と言ひ。「あの呪はれたるフォルレスの曠野の魔法使ひの妖婆が炊いてゐる大釜の吸物の中に這入つてゐる（中略）小梟の翼は、呪咀上に於ける効力の必須要素とされた。」「マクベス」の城内の場面、あの暗黒の行爲が、眠つてゐるダンカンの上に襲ひかゝらんとした時に、キヤーキヤーと叫んだのも梟であつた。それは最も嚴酷な夜の別れを告げる運命の觸れ人である」といふ興味深い指摘もある。

(8) 「それから」——菅沼の家は谷中の清水町で、庭のない代りに、椽側へ出ると、上野の森の古い杉が高く見えた。それがまた、錆た鐵の様に、頗る異しい色をしてゐた。其一本は殆ど枯れ掛かつて、上の方には丸裸の骨許り残つた所に、夕方になると鳥が澤山集まつて鳴いてゐた（七）「門」——山門を入ると、左右には大きな杉があつて、高く空を遮つてゐるために、路が急に暗くなつた。其陰氣な空気に触れた時、宗助は世の中と寺との區別を急に覺つた。静かな境内の入口に立つた彼は、始めて風邪を意識する場合に似た一種の惡寒を催した（十八）「疊を庄する杉の色が、冬を封じて黒く彼の後に聳えた」（二十一）

日記・明治四十二年三月十五―「森の杉赤黒く見ゆ」

断片・明治四十三・四―「大久保から戸山へ抜ける處で雨に逢ふ。どうせと思つたからズブ濡デ悠々とあるく、後から馳ケテ通り越すものがある。若葉が *Paint* (「な」) 杉を背景ニシテ軟かに見える。夫か一齋原ニ葉ヲ飄ガ(「へ」)シタカカラ軟カイ者ガ急ニ凄まじくなつて背景ノ杉ノ物すごい色ト調和シタ」

- (9) 「日本書紀」卷第一・神代上「一書曰、素戔嗚尊曰、韓郷之嶋、是有_二金銀_一。若使吾兒所御之國、不_レ有_二浮寶_一者、未_二是佳_一也、乃拔_二鬚鬣_一散之。即成_二杉_一。又拔_二散胸毛_一。是成_二檜_一。(中略) 乃稱之曰、杉及檜樟、此兩樹者、可_レ以爲_二浮寶_一。檜可_レ下以爲_二瑞宮_一之材也。」(岩波・日本書紀・典文学大系)

「伊勢神宮の20年ごとの造営には、古来特に木曾から良質の材を選定して用いている。樹皮は古来屋根に用いられ、檜皮ひわだぎと呼ばれ、神社建築にはなくてはならないものである」(平凡社、世界大百科事典)

- (10) 「樹木の伝説」若松多八郎著、昭和50・3・東北出版企画。

- (11) 銀杏の伝説―杖銀杏、乳銀杏、子授け銀杏、おかめ銀杏など(神話伝説辞典)

- (12) 橋杭岩伝説など(神話伝説辞典)

漱石はウイリアム・ジェームスの「宗教的経験の諸相」を通して早くから無意識、潜在意識については知っていたが、これが重視されてくるのは「夢十夜」の前に書かれた「坑夫」あたりからである。「坑夫」で潜在意識は「潜伏期」という語をもつてとかれ、人間の内部を支配する重要な要因であるとされている。

- (13) 第一夜の背景として三上公子氏はテニソンの「モード」を挙げている。(『第一夜』考) 昭和51・3・国文目白)

また氏は同論文で女の眼を鏡と取る発想は英文学から来ているとし、例としてキーツの詩を引用している。

- (14) 「白い裸馬に乗って駆けつけてくる女のイメージは、『それから』の「七」に出てくる「ヴルキイル」のそれにはかならない。(中略) さて、ヴルキイルに見立てられる雄々しく美しい救いの女騎士は、「天探女」の出現によって阻止される」(竹

盛天雄氏「イロニーと天探女―「夢十夜」論」昭和51・11・国文学)

「ヴルキイル Valkyrie 北欧神話に出てくる人物。戦場の空を舞い、名譽の戦死者を天国に案内する十二人の少女の一人」(岩波・漱石全集・注解)